

## 山陰地方の青銅器をめぐって

The Study of Bronze Ritualistic Implements in the San'in district

石橋茂登

ISHIBASHI, Shigeto

**要旨** 本稿では、山陰地方、とくに出雲に焦点をあてて、銅鐸・銅矛・銅剣といった弥生時代の青銅器を論ずる。荒神谷遺跡の発見以降、出雲は弥生青銅器祭祀の一大中心地であることが明らかとなってきた。荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡はともに圧倒的多量の青銅器を埋納しており、両者には密接な関係が窺われた。一方、志谷奥遺跡では異なる埋納の仕方をしており、別の集団による祭祀と考えられる。出雲の青銅器を理解するにあたって、北部九州や畿内勢力に属することの証明としてみるのではなく、出雲の主体的な動きを重視しなければならない。弥生時代後期になると北部九州や畿内・東海地方と異なり、青銅器祭祀が山陰地方では衰退する。青銅器祭祀の衰退、四隅突出型墳丘墓の出現・盛行と、首長層の発展、本格的な鉄器の流通と価値観の変化は、いずれも一連の変化として理解すべきである。

### はじめに

本稿では、山陰地方の弥生時代の青銅器、なかでも多数の青銅器が出土している出雲に注目してその特徴と、近畿地方、北部九州などとの関係について考えてみたい。

かつて弥生時代の青銅器分布は、和辻哲郎以後、近畿地方を中心とした銅鐸文化圏と、北部九州を中心とした銅矛銅剣文化圏として理解された。しかし、そのような単純な図式が成立しないことはすでに多くの研究者が指摘しているところである。

比較的近年まで山陰地方は青銅器が希薄な地域であり、およそ青銅器研究の主要な対象地域ではなかった。しかし1984年、358口もの銅剣が島根県荒神谷遺跡で発見されたことによって、状況は一変した。翌年には隣地で銅鐸6口と銅矛16口の一括埋納がみつき、その後も1996年に加茂岩倉遺跡で39口の銅鐸が発見されたのをはじめ、各地での発掘調査の進展によって増加した資料から、出雲が青銅器祭祀の一大中心地だったことが明らかとなってきた。

荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡は物量が多いというだけでなく、豊富な情報を含んだ重要な資料である。荒神谷遺跡では銅鐸6口・銅矛16口と銅剣358口が埋納されていた。銅剣358口というのは、当時全国で知られていた銅剣の総数を上回る膨大な量である。また、近畿地方に分布の中心がある銅鐸と、同じく北部九州の銅矛とが一つの埋納坑に埋められていたことも注目された。加茂岩倉遺跡では、銅鐸39口が埋納されていた。それまで知られていた最多の銅鐸出土例は滋賀県大岩山の3地点計24口であり、次いで兵庫県桜ヶ丘の14口であるので、39口というのは圧倒的な数である。加茂岩倉遺跡の銅鐸と近畿地方各地から出土している銅鐸との同範関係も明らかとなり、銅鐸の製作と移動を考える上で重要な知見をもたらした。そして、荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡とは近距離に位置するだ

けではなく、荒神谷遺跡の銅剣の茎にある「×」状の刻みが加茂岩倉遺跡の銅鐸の鈕にある「×」状の刻みと共通していることから、両遺跡は密接な関係があると考えられている。

このほか、出雲には銅剣と銅鐸が共伴した志谷奥遺跡、北部九州で製作された福田型銅鐸であり伝出雲出土とされる銅鐸など、注目すべき資料がある。

また、山陰地方では弥生時代中期後葉から四隅突出型墳丘墓が作られはじめ、後期に盛行する。その一方で、弥生時代後期に製作されたと考えられているⅣ式（突線鈕式）銅鐸は山陰地方には希薄である。そのため、青銅器祭祀は近畿・東海地方より先に終焉を迎えたとみられる。とはいえ、鳥取県青谷上寺地遺跡ではⅣ式銅鐸の破片が出土しており、山陰地方に新しい段階の銅鐸がまったくなかったわけではない。

このような状況を踏まえ、出雲を中心として山陰地方の青銅器を検討することによって、青銅器のありかたに現れる地域間の関係、あるいは青銅器祭祀の変遷を考察する一歩とすることができると思う。

## 1. 各地の概要

まず山陰地方の各地域にどのような青銅器があるのかを概観する。銅鐸はⅠ式（菱環鈕式）、Ⅱ式（外縁付鈕式）、Ⅲ式（扁平鈕式）、Ⅳ式（突線鈕式）に区分され、各段階がさらに細分される<sup>1)</sup>。本稿では山陰道に属する旧国のうち、石見・出雲・隠岐・伯耆・因幡をとりあげた。

### a. 石見（島根）

石見から出土した青銅器には以下のようなものがある。

中野仮屋 銅鐸 2 口。Ⅳ－1 式、Ⅲ式新段階。

城山 銅鐸 2 口。ともにⅢ式古段階。

水田ノ上遺跡 銅戈 1 口。細形銅戈の鋒部の破片である。

島根県西部の石見ではごく少数の発見例しかないが、山陰地方の中でⅣ－1 式の中野仮屋 1 号鐸は新しい類であり、注目される。加茂岩倉遺跡の銅鐸より新しい時期の銅鐸がもたらされていることになる。出雲にみられるような古い段階の銅鐸がないことから、出雲に比べて遅れて銅鐸の使用が始まった可能性もあろう。地理的に言っても九州から銅戈がもたらされていることはむしろ当然である。

### b. 出雲（島根）

出雲から出土した青銅器には以下のようなものがある。

志谷奥遺跡 銅鐸 2 口、銅剣 6 口。銅鐸はⅡ－2 式、Ⅲ式古段階とされる。銅剣はすべて中細形 c 類。

荒神谷遺跡 銅鐸 6 口、銅矛 16 口、銅剣 358 口。銅鐸はⅠ式 2 口、Ⅱ式 4 口とされる。Ⅰ－1 式の 5 号鐸は鱗がほとんどなく、Ⅰ式銅鐸のなかでも特に古式のものともみられている。1 号鐸は鈕の断面形状や文様が独特な類例のないものであり、出雲産の可能性、ある

<sup>1)</sup> 難波洋三「銅鐸」『弥生文化の研究』6、雄山閣、1986 年。

いは九州系とも言われている。2号鐸は梅ヶ畑4号鐸（山城）と、3号鐸は出土地不明鐸と同範。銅矛は中細形2口と中広形14口があり、岩永分類では中細形a類から中広形b類、松本分類ではそれに中広形c類を加えたものにわけられる。銅剣はすべて中細形c類である。

加茂岩倉遺跡 銅鐸39口。Ⅱ-1式が19口、Ⅱ-2式が9口、Ⅱ-2～Ⅲ-1式が2口、Ⅲ-2式が6口、Ⅲ-2～Ⅳ-1式が3口である。同範関係は次のように明らかにされている。

Ⅱ-1式では3号と30号、4号・7号・19号・22号・太田黒田銅鐸（紀伊）、6号・9号・辰馬考古資料館419号鐸、14号と33号、17号と上牧銅鐸（大和）、36号と念仏塚銅鐸（美作）、24号・38号・39号の、それぞれが同範である。Ⅱ-2式では5号と気比2号鐸（但馬）、11号と川島神後銅鐸（阿波）、13号と下坂銅鐸（因幡）、21号・気比4号鐸（但馬）・伝陶器銅鐸（和泉）・伝福井銅鐸（越前）、31号・32号・34号・上屋敷銅鐸（因幡）・桜ヶ丘3号鐸（摂津）が、それぞれ同範である。Ⅱ-2～Ⅲ-1式の15号と伝淡路銅鐸、Ⅲ-2式の1号と26号も同範である。またⅡ-1式の16号と伝美濃出土銅鐸が同範の可能性ありとされている。

西川津遺跡 銅鐸体部破片。Ⅱ-2式かⅢ式古段階のもの。

青木遺跡 近畿式銅鐸飾耳破片。Ⅳ-3I a式の可能性があるとする。

真名井遺跡 九州型の中細形銅戈1口。ほかに同じ命主神社境内の大石の下から銅剣1口・銅矛2口も出土したというが、現在は銅戈だけが残されている。

松江市竹谷町 銅剣1口。

伝横田八幡宮 銅剣1口。中細形c類。

伝熊野銅鐸 Ⅱ-2式。

伝木次町銅鐸 Ⅱ-2式。

伝出雲銅鐸 福田型。この伝出雲銅鐸は「邪視文」あるいは「辟邪文」とよばれる人面をあらわした文様に特徴があり、Ⅲ式段階の北部九州で製作された銅鐸と考えられている。佐賀県吉野ヶ里遺跡と同範である。

このほか、伝島根県出土の細形銅剣がある。

出雲の青銅器は山陰地方のなかでも最も多数、他種類が出土しているので、後述する。

#### c. 隠岐（島根）

武田遺跡 銅剣1口。中細形。

隠岐での出土は銅剣のみであるが、青銅器祭祀が伝播していたことの証拠である。

#### d. 伯耆（鳥取）

伯耆から出土した青銅器には以下のようなものがある。

八橋銅鐸 Ⅲ式古段階。

米里銅鐸 Ⅲ式古段階。

泊銅鐸 Ⅱ-1式。これは桜ヶ丘1号鐸・新庄銅鐸・出土地不明鐸と同範である。

倉吉市小田銅鐸 2口出土しており、Ⅲ式古段階、Ⅲ式新段階とされる。

このほか福田型の伝伯耆銅鐸、伝米子出土の銅鐸3口がある。

伯耆の銅鐸はⅡ～Ⅲ式銅鐸が大半を占めている。泊銅鐸について近畿地方との同範関係が明らかとなっている一方、伝ではあるが九州産の福田型銅鐸がある点に、東西両方の青銅器が入っていた山陰地方の特色が現れているといえよう。Ⅳ－1式以後の新しい段階の銅鐸がなく、もともと青銅器が希少な地域ではあるが、はやくに青銅器祭祀が衰退したのかもしれない。

#### e. 因幡（鳥取）

因幡から出土した青銅器には以下のようなものがある。

破岩銅鐸 推定Ⅳ式。梵鐘の材料にされたという。

下坂銅鐸 Ⅱ－2式。これは加茂岩倉13号鐸と同範である。

高住銅鐸 Ⅲ式新段階。

上屋敷銅鐸 Ⅱ－2式。これは桜ヶ丘3号鐸・加茂岩倉31号・32号・34号鐸と同範である。

越路銅鐸 Ⅱ－2式。これは伝吉野川銅鐸（阿波）・一の谷銅鐸（讃岐）と同範である。

青谷上寺地遺跡 銅鐸破片4点が出土している。Ⅳ－3～5式近畿式、Ⅳ－4～5式近畿式、Ⅳ式近畿式の新しい段階、Ⅲ式新段階。青谷上寺地遺跡では近畿式銅鐸の中でも新しい段階の銅鐸が存在することが大いに注目される。しかし埋納ではなく、集落遺跡から破片がみついているものであり、その評価は簡単ではない。出雲などくらべて地理的に畿内と近いので、弥生時代後期に畿内との密接な関係があったのか、それとも何らかの理由で銅鐸祭祀が終わった後に、銅鐸の破片が材料としてもちこまれていたのか、など、さまざまな可能性を想定できよう。但馬の兵庫県豊岡市久田谷遺跡では、Ⅳ－5Ⅱ式近畿式銅鐸の破片117点が出土しており、最も新しい型式の銅鐸が意図的に破壊された例として知られている。青谷上寺地遺跡の近畿式銅鐸破片も同様の性格のものかもしれない。

このほか、伝破岩銅鐸がある。

## 2. 出雲の青銅器

次に、山陰地方のなかでも特に多種、多量の青銅器が発見されている出雲に焦点をあててみたい。出雲は全国的に見ても有数の青銅器集中地域といえる。古代出雲、荒神谷遺跡などの弥生青銅器をめぐっては膨大な研究があり、そのすべてを論じることはできないが、ここでは筆者の関心をひいたいくつかの遺跡を中心に考えてみたい。

#### a. 志谷奥遺跡

鳥根県八束郡鹿島町佐陀本郷に所在する。遺跡発見の経緯は農作業によるものである。1973年、佐陀川からほど近い谷の中腹から銅鐸2口（Ⅱ－2式・Ⅲ式古段階）と銅剣6口（中細形c類）が出土した。その後、出土地点の発掘調査が行われ、埋納坑が検出された。青銅器の埋納状態は銅剣を束ねたような状態で鋒を下に向け、その脇に銅鐸の鈕を下向けにした倒立状態だったと判明している。合計8口という比較的多数の一括埋納であり、その埋納状態も荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡と異なることが注意される。

注目されるのは遺跡の立地である。遺跡は神名火山とされる朝日山の東北麓にあたり、



図1 志谷奥遺跡周辺地図

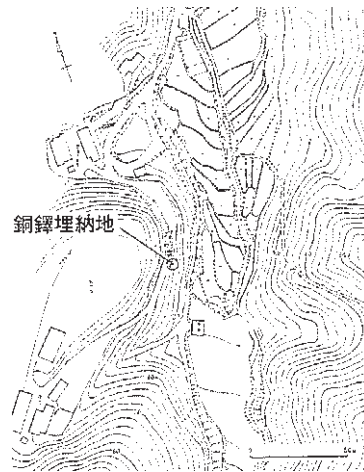


図2 志谷奥遺跡地形図

佐陀川から500 mほど入った谷の中腹である。急斜面の中腹にあることは加茂岩倉遺跡などと共通する。志谷奥遺跡と佐陀川を隔てた対岸には恵曇神社がある。風土記にみえる古社であり、磐座があるという<sup>2)</sup>。佐陀本郷の西の海岸は古浦の漁港であり、ここは現在でも良好な港である。それに注ぐ佐陀川は穏やかな水面で宍道湖に通じており、延喜式に出雲国二宮として記載される佐太神社の脇を流れている。現在の佐陀川は18世紀後半の天明年間宍道湖と恵曇を結ぶ運河として開削された人工河川だが、それがなかった古代においても、この地は宍道湖から日本海側へ出るにあたっては重要な交通路であったと推測され、港もあったであろう。また志谷奥遺跡の周辺には弥生時代前期を中心とした多数の人骨、貝輪やト骨が出土した古浦砂丘遺跡があり、遺跡の立地から考察すると、志谷奥遺跡はけして僻地ではなく、当時の重要地点であることが窺われる。

後述する荒神谷遺跡・加茂岩倉遺跡と比較すると、青銅器を集積して埋納する点では類似するが、異なる神名火山の麓にあり、別の地域集団による祭祀であったと考えられる。青銅器の埋納状態は横位ではなく縦方向にまとめて納められていたことも、荒神谷遺跡・加茂岩倉遺跡とは異なる埋納の作法がとられたことを示しており、このことを裏付けるといえよう。

#### b. 荒神谷遺跡

島根県簸川郡斐川町神庭に所在する。神名火山である仏経山を望む、小さな谷奥の急斜面中腹から、1984年に銅剣埋納坑が発見された。埋納坑内には358口の銅剣が4列に整然と、横位で刃を立てた状態にして並べられていた。翌年には銅鐸と銅矛を納めた埋納坑が、7メートルほど離れた隣接地から発見された。銅鐸・銅矛埋納坑には銅鐸6口と銅矛16口がこれも横位で、銅鐸は鱗を立てて3口ずつ鈕を向き合わせるように、銅矛は刃を立てた状態で交互に向きを変えて整然と並べられていた。銅剣の型式はすべて中細形c類であり、その中で43組の同範関係が確認されている。358口の長さは48.1～53.9センチメートルの範囲に収まっており、ほとんどが50センチメートル前後に揃っている。銅鐸

<sup>2)</sup> 山本清『古代出雲の考古学』ハーベスト出版、1995年。

の大きさも総高25センチメートルほどで揃っている。また、銅剣のうち344口には茎に「×」状の刻みがある。これは鑄造後にタガネのような工具で打刻されたものである。銅矛の型式は中細形2口と中広形14口があり、岩永分類では中細形a類から中広形b類、松本分類ではそれに中広形c類を加えたものにわけられる。銅鐸の型式は難波分類によるI式が2口、II-1式が5口となる。

I-1式の5号鐸は鱗がほとんどない、I式銅鐸のなかでも特に古式のものともみられている。4号鐸はかつてII式とされていたが、近年I式で5号鐸より新しいものとされている。1号鐸は鈕の断面形状や文様が独特な類例のないものであり、型式比定も難しい面があるが、出雲産の可能性あるいは九州系とも言われている個体である。

2号鐸は京都府梅ヶ畑4号鐸と同範、3号鐸は出土地不明鐸と同範とされており、近畿とのつながりが看取される。一方、銅矛は佐賀県検見谷遺跡などと共通の研ぎ分けで仕上げられており、北部九州とのつながりが明らかである。中細形c類銅剣358口については、それまでの全銅剣出土量を超える大量であること、志谷奥遺跡など山陰に中細形c類銅剣の分布が集中すること、荒神谷遺跡出土品の中に仕上げ研磨されていない鑄放し品があることなどから、出雲で生産された銅剣であると考えられている。荒神谷遺跡のものだけでなく、中細形c類の銅剣は中部瀬戸内から四国東部に分布し、山陰地方を中心にみられること、特に荒神谷遺跡で大量に出土したことから、出雲型ともいわれている。ただし荒神谷遺跡と他の銅剣では多少違いがあることから、中細形c類すべてが出雲産とは言い切れないという意見もある<sup>3)</sup>。

荒神谷遺跡の青銅器は、銅鐸が弥生前期末～中期前半頃(I～II期)、銅剣が中期中頃(III期)、銅矛が中期中頃～後半(III～IV期)に製作されたものと考えられており、次に述べる加茂岩倉遺跡の銅鐸は中期に製作されたものと考えられる<sup>4)</sup>。いずれも埋納は中期末あるいは後期初頭と考えられる。

荒神谷遺跡の青銅器については既に論じられているように、銅剣は単一の型式で大量に

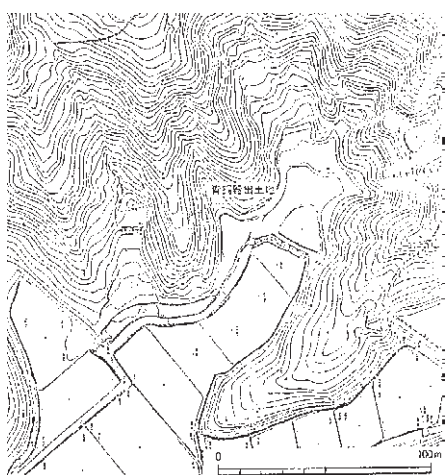


図3 荒神谷遺跡地形図

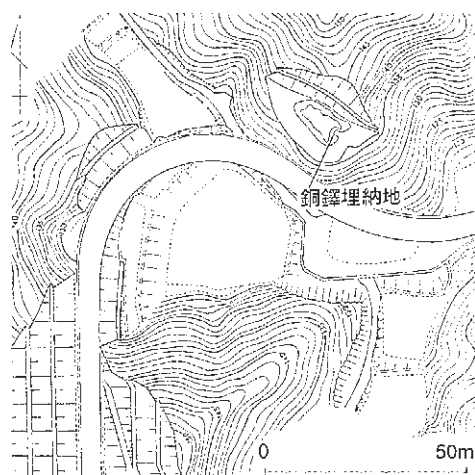


図4 加茂岩倉遺跡地形図

<sup>3)</sup> 足立克己「荒神谷と加茂岩倉」『季刊考古学』第86号、2004年。

<sup>4)</sup> 『古代出雲文化展』島根県教育委員会・朝日新聞社、1997年、p.42挿図23。

揃えられていることから、短期間のうちに一箇所で製作されたと考えるのが妥当である。一方で銅鐸・銅矛は最も古い銅鐸と最も新しい銅矛とで製作された時期にかなりの時間差があり、銅鐸も銅矛も複数の型式から構成されている。長期にわたって集積・保管されていた可能性と、銅鐸が複数の型式を含みながら大きさがそろっていることから、ある時に意識的に集められた可能性との、両方がありうる。

### c. 加茂岩倉遺跡

島根県雲南市加茂町に所在する。荒神谷遺跡よりは大きな谷であるが、やはり谷の奥まったところ、急斜面の中腹に埋納坑がつくられていた。工事中の不時発見であったが、合計39口の銅鐸が見つかり、部分的に残されていた埋納坑と、銅鐸に付着した土の観察などから、横位で鱗を上下に立てた状態で、大型の銅鐸の内部に小型の銅鐸を入れ子と呼ばれる状態に納めて、埋納されていた状況が明らかとなった。

銅鐸の大きさは45センチメートル前後と、30センチメートル前後に2大別され、よく揃っている。型式はⅡ-1式が19口、Ⅱ-2式が9口、Ⅱ-2～Ⅲ-1式が2口、Ⅲ-2式が6口、Ⅲ-2～Ⅳ-1式が3口である。銅鐸の文様などの分析から、39口のうちには複数系統があることがわかっている。それでありながら、大きさが揃っている点が大きな特色である。また流水文では摂津周辺で製作されたとみられる縦型流水文がなく、河内・大和周辺で製作されたとみられる横型流水文だけが搬入されており、加茂岩倉遺跡の銅鐸を保有した人々は、かなり意図的な銅鐸の集め方をしたとみられる。とはいえ長期間にわたって次第に集積したものか、ある一時に収集したものかは、どちらも可能性が考えうる。

加茂岩倉遺跡の同範関係は15組26口が確認されている。加茂岩倉遺跡出土品どうしの場合もあれば、因幡（鳥取県）・美作（岡山県）・但馬（兵庫県）・摂津（兵庫県）・阿波（徳島県）・大和（奈良県）・紀伊（和歌山県）・伝和泉（大阪府）・伝越前（福井県）といった各地から出土した銅鐸と加茂岩倉遺跡の銅鐸が同範である場合もある。近畿を中心とした西日本各地の銅鐸との同範関係は銅鐸の生産と移動を考えるうえで重要である。また、39口のうち14口には、鈕の菱環部の頂部付近に「×」状の刻みがある。鑄造後にタガネ状の工具で打刻されたものであり、荒神谷遺跡との共通性が指摘されている。また、Ⅲ-2～Ⅳ-1式とされる3口は特徴的な文様構成と絵画をもち、出雲産の可能性が指摘されている。足立克己はⅢ-2式の袈裟襷文銅鐸も出雲産の可能性を指摘している<sup>5)</sup>。次節でも言及する銅鐸の研磨の状況からすると、加茂岩倉遺跡での袈裟襷文の研磨はⅢ-2式だけ、その6口すべてに見られる。一方、Ⅲ-2～Ⅳ-1式とされる3口は絵画のある区画内は もちろん、裾や舞の無文部も面的な研磨をしておらず、若干の違いがある（鑄掛部分だけ研磨している）。同じ出雲産だがやや新しい要素を持つ後者は仕上げが異なるということなのか、工人系統が違うのかは、もう少し研究する余地がありそうに思われる。

### d. 荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡

遺跡の立地に目を向けると、荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡は直線距離で3.4キロメートル

<sup>5)</sup> 足立克己「荒神谷と加茂岩倉」『季刊考古学』第86号、2004年。



跡の銅鐸群を比較すれば、加茂岩倉遺跡のほうがあきらかに新しい銅鐸群なので、「×」印は後出の要素という可能性がある。だとすれば、荒神谷遺跡で銅鐸・銅矛埋納坑と銅剣埋納坑には時間差があまりないと考えられているが、「×」印をもつ銅剣埋納坑のほうが後出の要素を持っているように思えてくる。ところが、荒神谷遺跡の銅鐸・銅矛埋納の時期は中広形b類銅矛の製作時期からして、弥生時代中期末（Ⅳ期）以降となる。加茂岩倉遺跡も出雲産といわれている絵画のある銅鐸がⅢ式～Ⅳ-1式の過渡的な段階とされており、その製作時期は弥生時代中期でも末頃ということになろう。したがって製作されてから埋納までの時間が同じくらいとすれば、荒神谷遺跡の銅鐸・銅矛埋納坑と加茂岩倉遺跡の銅鐸埋納坑の時期的な差は、さほどないことになる。中細形c類銅剣は荒神谷遺跡の銅鐸と中広形b類銅矛の間の時期に位置づけられるので、製作から埋納まで時間差がないとすると、むしろ銅鐸・銅矛埋納坑より銅剣埋納坑が早いということになり、先と逆転してしまう。結局、「×」印の有無から埋納の時期を読み解こうとすると、製作から埋納までの時間をどう想定するかと、「×」印がいつつけられたと想定するかによって、話が大きく変わってしまう。至近距離にある荒神谷遺跡の銅剣と銅鐸・銅矛で「×」印の有無が使用者の違いを示すとも思えない。青銅器の型式や産地とも対応せず、青銅器の時期差でもなさそうである。結局、なぜ荒神谷遺跡の銅鐸・銅矛に「×」印がなく、荒神谷遺跡の銅剣と加茂岩倉遺跡の銅鐸に「×」印があるのかは、重要な情報を示しているように思えるが、その解釈は困難というのが現状である。

次に同範銅鐸の分布をみてみよう。加茂岩倉遺跡の同範銅鐸の分布図をみると、加茂岩倉遺跡を結節点として近畿から山陰地方の各地が線で結ばれる。荒神谷遺跡の銅鐸では京都府梅ヶ畑銅鐸（山城）と同範関係があり、ここでも畿内との関係が認められる。一方で伝出雲銅鐸は佐賀県吉野ヶ里遺跡出土銅鐸（肥前）と同範とされる。出雲地方から近畿、四国、中国、あるいは九州に、同範銅鐸のネットワークがある。これは、古墳時代の同範鏡の分布図に照らせば、加茂岩倉遺跡がちょうど椿井大塚山古墳のような位置づけにあたる。しかし、銅鐸の多くは近畿地方の産と考えられるし、加茂岩倉遺跡の弥生人が銅鐸を各地に配布したと考えれば荒唐無稽であろう。すなわち、加茂岩倉遺跡から読み解かれる銅鐸のありかたは、モノの動きにおいて古墳時代とは異なる状況が存在したことの証左である。畿内の集団が銅鐸を与えたために銅鐸が分布しているとして理解しようとするのは、やはり困難だと思われる。弥生時代中期頃は、いまだ本格的な鉄の時代ではなく、石器時代のモノの移動を基本として考える必要がある。

佐原真は次のような素描を描いた<sup>7)</sup>。島根・鳥取県は、はじめ畿内の銅鐸、ついで北部九州の銅矛と銅鐸をもち「畿内・北部九州双方の祭器をあわせもって、両方に顔を立てた」とみる。東西の祭器に対抗して出雲は自前の象徴として大量の銅剣を作ったが、各地に配るには及ばず、一箇所に埋納したのが荒神谷遺跡だという。そして畿内・北部九州は「自らの象徴である祭器を所有させることによって、自らとのつながりを明らかにさせることを意図したかのよう」だとみていた。しかしながら、近畿や北部九州勢力に属することの象徴として青銅器を理解しようとするれば、荒神谷遺跡は北部九州（銅矛）にも近畿（銅鐸）にも、そして出雲という第三の勢力（銅剣）にも属していることになり、おかしな話とな

<sup>7)</sup> 佐原真『祭りのカネ銅鐸』、講談社、1996年、pp. 152-154。

るだろう。岩永省三は荒神谷遺跡で銅鐸と銅矛が共伴したことについて、「銅鐸と銅矛が排他的になる前の時期のことであるから、共伴しても不思議ではない」と指摘した<sup>8)</sup>。どうして埋めたのかという理由は明らかにしがないが、すくなくとも青銅器は服属の証といった意味をもっておらず、それが故に古墳時代には存続しなかったと考えるほうが理解しやすいであろう。

出雲では、旧石器時代・縄文時代からすでに、東北地方とも九州とも交流していたことが、遺物から明らかとなっている<sup>9)</sup>。日本海側の各地は、時代を超えて連綿と広域の交流を続けていた。銅鐸でも、福田型とよばれる横帯文銅鐸は、福岡市赤穂浦遺跡でみつまっている鑄型に鹿と鉤の絵があらわされており、常松幹男<sup>10)</sup>によればこのモチーフは北部九州の甕棺の線刻画に起源し、瀬戸内地域に分布する平形銅剣にも受け継がれた。福田型である伝出雲出土と伝伯耆出土の横帯文銅鐸も北部九州産と考えられ、製品が移動してきただけでなく、福田型銅鐸を受容した思想的背景には北部九州と共通する価値観が存在したことを想定してよいだろう。荒神谷遺跡に北部九州の銅矛・近畿の銅鐸・出雲の銅剣があることも、四隅突出型墳丘墓が広い分布を見せることも、日本海側の広域の交流を前提として考えれば、むしろ当然のことである。特に青銅器については、出雲の持つ地理的特性によって、西からの文物も東からの文物も集積され、出雲独自の文物も多量に製作されていたのだと、出雲の主体的立場を重視して考えるべきである。

### 3. 青銅器祭祀の衰退

#### a. 弥生墳丘墓

弥生青銅器を用いた祭祀の衰退と、弥生墳丘墓の盛行とは関係があるといわれている。ここではその点について考えてみたい。弥生時代の墳丘墓は中期ころには各地でつくられていると言われ、出雲では波来浜墳墓群はすでに四角い墳丘と貼石をもつ。中期中葉～末葉に比定される方形貼石墓が、後期前葉以降に盛行する四隅突出型墳丘墓へと展開すると考えられている<sup>11)</sup>。山陰地方に四隅突出型墳丘墓として拡散・発達し、中期末の青木遺跡4号墓、弥生時代後期後半には出雲市の西谷3号墓や、宮山遺跡Ⅳ号墓のごとき大型の墳丘墓として最盛期を迎える。その分布範囲は中国地方から北陸地方にまで及んでおり、鳥取市の西桂見墳丘墓や福井県清水町の小羽山30号墓はその地域最大の墳丘墓とされている。これらは、この時期の山陰地方が広範囲にわたって共通の価値観をもっていたことの証明であり、そこに同盟関係などが考えられている。また西谷3号墓では吉備の特殊器台なども出土しており、地域を超えた首長層どうしの密接な交流があったことも明らかとなっている。弥生時代後期、山陰地方は四隅突出型墳丘墓での祭祀、吉備は特殊器台・特殊壺を用いた墳丘墓での祭祀が盛んとなり、ともに銅鐸や武器形青銅器の祭祀は衰退するといわれる。それに対し、同じころ北部九州では銅矛を、近畿・東海地方では銅鐸を用い

<sup>8)</sup> 岩永省三『金属器登場』講談社、1997年、p. 71・82。

<sup>9)</sup> 原田敏照「海流が育む多彩な文化」『古代出雲文化展』、pp. 32-35。

<sup>10)</sup> 常松幹男『最古の王墓・吉武高木遺跡』新泉社、2006年。

<sup>11)</sup> 仁木聡「四隅突出型墳丘墓の「配石構造」の系譜と展開」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター、2007年。

た祭祀が盛んにおこなわれているといわれている。しかしながら、北部九州で銅矛の祭祀が残るのは事実だが、一方で漢の鏡を大量に副葬する王墓も中期後半以降、博多湾周辺でつくられている。東海地方でも方形周溝墓が発達し、中期末以降、特定集団墓、特定家族墓、そして岐阜市瑞龍寺山山頂墳墓のような個人墓へと変化していくとされている。そういった状況からすれば、出雲や吉備で青銅器祭祀が衰退し、北部九州や畿内・東海に残るという点は事実であろうが、四隅突出型墳丘墓や吉備の特殊器台を用いた墳丘墓祭祀と対比すべきは、銅矛と近畿式・三遠式銅鐸ではなく、やはり各地に出現して発達しつづける弥生墳墓の祭祀そのものでなければならない。広形銅矛・近畿式銅鐸・三遠式銅鐸の時期には、出雲・吉備は青銅祭器の空白地帯となっていたのであろう。

青銅武器類を祭器として扱う風習は中国・四国地方にはじまるという見方がある<sup>12)</sup>。北部九州ではもともと実用品、副葬品として青銅器の使用が始まり、その後も副葬と埋納は共存し続ける。それに対し、出雲などの中国・四国地方では副葬せずに埋納だけに使用するからである。青銅武器を副葬品とせずに祭器として発達させた地域が、弥生時代後期になると他地域に先駆けて祭器としての青銅器を捨て去った。その中国・四国をとりまく周辺地域ともいえる北部九州・畿内・東海において、祭器としての青銅器が継続して使用されたというのは興味深い現象である。青銅器の祭器化が中国・四国地方に始まったとすれば、祭器として青銅器を用いる風習がそこを中心として次第に拡散し、中心地ではすでに衰退した後にも、周辺部に遅くまで残存したという見方ができる。そして、それはきわめて自然な変遷といえるであろう。無意識的に畿内、あるいは北部九州が弥生時代における物事の変化の起点と考えてしまいがちだが、山陰地方を中心とした変化もあったと考えると、青銅祭器の変化がよりよく理解できるかもしれない。

## b. 鉄器の普及

鉄器は弥生時代の中期には関東・東北にまで現れているが、各地に本格的に普及するのは弥生時代後期といわれており、畿内では弥生時代後期に石器が消滅する。石器から鉄器への変化は、鉄素材の入手が大陸との交通を必須条件として始まったことに大きな意味がある。畿内では中期後半に鉄器が増加し、禰宜田佳男<sup>13)</sup>はⅣ期を画期としている。禰宜田は弥生中期までは、拠点集落ごとに交換物資をもち、それらが流通することで社会全体としてまとまりを保っていたとし、共同体間に分業体制が成立していた体制を「石器の流通システム」と呼んだ。青銅器・鉄器の素材は大陸に求めることになり、中期後半に鉄器の普及が画期を迎えたが、まだそれは「石器の流通システム」内で移動していたとみられる。ところが弥生時代後期、Ⅴ期に流通システムの大きな変化、社会の変化があり、その変化の中で首長の地位も変化したとみられている。中期の拠点集落間の相互依存による分業体制下では、特定の首長が強大化することはなかったが、鉄を中心とした後期の体制下では、鉄の流通を握る一部の首長が独占的に富を得ることになる。鉄や青銅といった大陸に求められるものと、中期以来の在地的なものと、重層的な流通体系になったという。「鉄の流通システム」への変化は大きな画期であり、「鉄素材の流通を掌握し、関与すること

<sup>12)</sup> 松本岩雄「青銅器分布の違いは何を示すか」『古代出雲文化展』、p. 58。

<sup>13)</sup> 禰宜田佳男「石器から鉄器へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店、1998年。

のできた集団に多くの物資や情報が集中し、政治的にも経済的にもより上位に位置づけられることとなった」という禰宜田の指摘は当を得たものといえよう。

弥生青銅器の祭祀も中期から後期にかけて大きく変化したとみられ、青銅器の大量埋納は中期末に始まったとされている。鉄を契機とした流通の変化、それに伴う首長層の変質は、青銅器祭祀に変化をもたらし、墓制にもその変化を映している。さらに古墳時代にむけて社会が変化した時が、青銅器祭祀が不要とされて終焉を迎えた時であろう。

北部九州の青銅器については、副葬品の状況から、吉武高木遺跡では青銅武器よりもヒスイの勾玉に代表される装身具に高い階層性がみられるという<sup>14)</sup>。吉武高木遺跡—吉武大石遺跡—その他の墓群、という階層性が指摘される一方、吉武高木遺跡だけでなく吉武大石遺跡の墓にも青銅器が副葬されていることを考えれば、青銅器は貴重なものには違いないが、必ずしも最高ランクの物品というわけではないようである。北部九州では、紀元前108年の楽浪郡設置以後、前漢文化の流入とともに墓の副葬品にも変化が生じたと考えられている。朝鮮半島に起源をもつ多鈕鏡・青銅武器から、前漢の青銅鏡と鉄製武器が有力者の副葬品として重要視されるようになり、そこに価値観の変化が認められる。この副葬品の変化は、後の古墳時代に続く流れでもあろう。荒神谷遺跡の青銅器は弥生Ⅳ期後半とされる中広形銅矛b類を含むので、北部九州でそのような変化が起こった弥生時代中期後半以後に埋納されたものである。北部九州と山陰地方の交流が盛んであったと考えられることを鑑みれば、荒神谷遺跡をつくった人々は、北部九州の王たちの前漢文化を重視する価値観、すなわち武器形青銅器ではなく前漢鏡と鉄製武器が権力者の宝器だという価値観を知っていた可能性も憶測されよう。弥生時代中期末～後期初頭の埋納と推定される荒神谷遺跡・加茂岩倉遺跡の青銅器の大量埋納は、北部九州と比較する時、前段階の価値観を色濃く残した武器形青銅器を重視する風習の、最後の華のようにも見えるのである。出雲ではその後、Ⅳ式銅鐸や広形銅矛などが盛んに用いられた様子はない。大量埋納で頂点に達した青銅器祭祀の衰退と、四隅突出型墳丘墓の盛行すなわち権力者階層の発達・価値観の変化は、やはり一連のものとして考えるべき問題である。岩永省三<sup>15)</sup>は近藤義郎の説を踏まえて「Ⅴ期以降の墳丘墓でおこなわれたのが、首長権継承儀礼であったかどうかはともかく、この儀礼が見せかけ上の集団祭祀として、青銅器祭祀に取って代わったという見通しが立つ」といい、青銅器祭祀の形骸化が進み、生産が有力集団の長のもとに集中したため、「支配者側がそれを必要としなくなったとき、あっけなく忘れ去られたとでも考えざるを得ない」と述べている。出雲での青銅器祭祀の変化をみていくと、この意見は妥当なものに思える。

## まとめ

以上、雑駁ではあるが、山陰地方、特に出雲を中心としてみてきた。出雲は山陰地方の青銅器祭祀の中心地と目され、その後の弥生墳丘墓を考える上でも重要な地域である。その出雲で用いられていた青銅器には、九州のもの、近畿のもの、出雲のものが混在してい

<sup>14)</sup> 常松幹男『最古の王墓・吉武高木遺跡』新泉社、2006年。

<sup>15)</sup> 岩永省三『金属器登場』、講談社、1997年、pp. 107・150。

る。中国・四国地方が青銅武器の祭器化に大きな影響を与えた地域とすれば、そのもっとも大量な使用例が荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡であり、青銅器祭祀のひとつのピークであろう。山陰・中国地方で青銅器祭祀が畿内や北部九州より先に衰退したことは、中国・四国地方を青銅器祭祀の中心とみれば、周縁部に遅くまでそれが残存した現象とみることも可能である。しかし出雲のみならず山陰地域の青銅器をめぐっては未解明の問題は多く、弥生時代の青銅器祭祀を理解する上で重要な地域であるだけに課題も大きい。いずれにせよ、畿内・北部九州から青銅器を与えられ、それらに属することの証拠として出雲の青銅器を理解するのではなく、出雲の主体性を前提として、青銅器祭祀の変遷を考究しなければならない。

図出典

図1～4 鳥根県教育委員会『青銅器埋納地調査報告書Ⅰ（銅鐸編）』2002年。

図5 鳥根県教育委員会・加茂町教育委員会『加茂岩倉遺跡』2002年。

図6 筆者撮影。